



射水

一  
辰



特別  
5  
1827



1827  
5  
1827  
巻



十夫と稱し——古翁の門ありきし多岐西  
湖南の心をありて一之を撰集乃終を  
あげむ中を以て——所あるをさるるを  
あつらひ中は之を信せしむる——又毎  
かつ洛陽新波のふりりを侍に侍して  
加筆独れあり——紙の意存あり——むら  
り——こふと——むらむら——三百家駢文

附録二

かりしあらしをさしハ赤き国ハ地勢ノ東  
西ノ一帯ノ事トシハ二上山れ市ノ一郭云  
の形雨をさし南ノ和ガリノ流ノ一人  
れ多きまきをさしふるゆれさく三時也  
ううういれハ風雅れふよりぬうハ東  
もつとも一帯をさしけむる事ハ地なり事  
トモ洛の法師をさしして古翁の吟詠  
二章をさしけり是を錦れゆらりれ  
れとせんかハけ交撰集のむれかきハせり

名月れおやゆめくとさる白山

うとさる白山を籠系ハ尼拂

各時との二章を籠虎れ龍下とぬむ  
又何れ章ハ本とそのゆたさむはくむ  
あつハ亭かハおうにさるをさくむヤ  
ゆめハ律ろれくぬむりハ色  
あけくに古翁れけ園をさる隠ハハ時  
人のゆめくなくとあさゆハおおハぬれ  
きれさにくとせれゆらりハぬりてに

流々矣れし〜月ハうれと〜  
け射水川の水もせきつら〜  
る〜  
射水川〜光怪のあり〜  
をや〜要害乃〜  
後をや〜  
を射水川〜

九祿辛巳のう

文月十二日十夫自席

射水川 上

伊勢

記行

名祿九年春秋伊勢の國をけし  
風雅の女を遊を〜  
ぬ〜  
お〜  
あ〜  
あ〜

かゝるしありしはあまのつひに  
娘——かり——を

大波の松やあまのつひに松乃と 十丈

十丈 四——多層をさうの尸  
しれ——に我も遠くうれあは  
心——いん

岩れ秋ふらむむらあれ——危 支考  
垣れ木種——多層の海 滝菟

十六夜に昨日れ月の時——て 十丈

饑別

若のうまれ袖——さうはく別れ 滝菟  
跡めは我をの用さうあまのつひ 支考

京

洛のうまをさうのつひに  
あをわ——む

ゆりたれ風を舞しし原を飛——  
 十六  
 くらひのいさゝか秋湯の月  
 去来  
 五連の口みしかりぬ 船をぬり  
 全  
 胸れいしにれちつとくすく  
 夫  
 以はううを家しといふ心り  
 全  
 み——とるるをれ 振年  
 素

兼月の比紙の十文は——めてるれ  
 一——かとるるを別よのそそそ

兼のまや極ハクテトトし 風国  
 一——りれ妙なる月 十文  
 兼の時白田留ハ仕事——とあひよそ 全  
 見とるるあり——をりしれそや 国  
 志ハ——と風よむるハ目もあふ 夫  
 馬はるるし 柳—— 振年 素

兼波

紙の十文は——とくれてこの日の

寸火止

一、會を修む

櫛の香やたうして迫る乃ち 芝柏

二、おろし三声よみうつゝ帰 天堽

月のおろ山ハあはれしをさきて 十丈

あるまじ

越乃十丈吟士け袂伊勢訪て

おろし三声よみうつゝ山吟野咏文囊裏に添

むしは就中湖上の雲名庵を尋

て菴翁の古墳を吊婦一餘衣いま

た盡のりして吊の草菴に杖をひか

る葉の靡々粟津野の秋風に露

枯て一扱の草乃ち枕何事いひかるとん

ともさそふの跡又幾片せよとくと

ゆきしとせん方おろし三声よみうつゝ

往し皆中をせ悉てやうししりし

多かりありし跡往昔林下れ庵

ありては園山の鹿追の色

ををう風を何とぞとめりるるよ景情  
にほほとわらひの言さし  
の泣きうらうら又啼やまぬ声  
しをむし  
歌向の片は  
筆を地へ

鹿小屋の声ハゆりゆり庵の客 夫中  
やい月代れりるる梅すきさ 十丈  
きこれ葉のぬ時凡も目よりて 正秀

有れららうぬを巻きたりゆり立 州  
あぢの浪よものみのあしん 丈  
夕日の赤られ山うたをぬれ 秀

十丈れりし一柳にれ吟詠り  
きりく一柳の情を契て  
蕎麦の毒らんすらんうりと庵の客 正秀

二廟系



長月のけり 免古翁より廊前に  
ありては 権の真因を謝し  
よきまは ありてあり 驛路の  
よきまは ありてあり 備丈のかさきんに  
もみりて ありてあり 掃れやうに  
うきまを 古翁のけり 掃れ  
ふきまを ありてあり ありてあり  
ありてあり ありてあり ありてあり  
ありてあり ありてあり ありてあり

我うにをぬらるる ありてあり  
その時のけり ありてあり 今ありてあり  
ね 袂のけり ありてあり ありてあり  
目しありてあり ありてあり  
立は ありてあり や 神 ありてあり ありてあり 十六

老根

蹴れすまのけり ありてあり ありてあり  
ありてあり ありてあり ありてあり

今日ささぬし草序を待つる哉

小室のささぬし

松茸に八百孔宿ハささぬし

詩六

ささぬし松茸しし門の枯風 十丈

金澤

藤の干支はささぬし

ゆきさしに秋の便りささぬし

一丈は宿にゆきさし

風雅しハ穂て居りぬ秋 小枝

杖のちかさを 十丈

高岡

夕日ハ十丈しを帰し

人しはささぬし

の秋いささかと湖水乃月もささぬし

と口にささぬし

伊勢れ下向れほむし

のさあ清乃おまをいあひふり清心  
り燈一つにや清はあまをいおまをい

乃をいあまをいをの針の  
海一ハコをい

お立佳待まをいや鼻をあまをい風 河菱

は筆ゆれをい放の清をい 十丈

七月の月と月おまをいおまをい 北人

元禄九年九月中浣

ツリ

一まある二上山や三ありの四舞 少枝

五方の鳴るを六とく七風 野角

榴塚乃階を仕ぬへを月の出て 十丈

余所の小猫此啼か多や 虚舟

ま白又糸とりちを所を所 丹岫

を葉はくひの歌所 管具

乃翁と温泉入又村のめをりて

北人

垣のぬかりれちつた川よ

政之

鬼くし乃翁のこともしては照りしめ

蘭水

節のさるる縁起のゆた

河菱

かの人よりし屏風はあきあきあ

東白

秋乃憐とれ萩がむむ

し双

鐘のほろ舟川口う細いして

野角

文あるんんぬのうとくた月

小枝

一尺かゝるをきこのよりあ〜と

虚舟

をい〜らう〜とや又標本

十文

郭公と〜の節のを笑ワリ

後呉

遠く月つきを思婦一盃

北人

何事しら持て〜を〜とゆるれ

政之

〜の雨〜水乃おぬ川

丹油

教ぬの節の〜を〜けて筆のを

阿養

さぬ〜の〜の〜

宗水

燭寒今の二炬まてゐらるく極く是し双

きのもの物を色ゆきかきかき東白

る士も涙を流してくちりりれ小枝

合節の異なされううねり野角

本綿にひりて接造らるる野角のいせ十丈

茶をうとてして今も日乃慰る鹿舟

り灯を二つ後とて仕立もの北人

下を折て色をみかする管具

るやかくとりふるに言れ降後丹油

野田の風は文く吹政之

月をうそ古靴のそく片あつり三系水

亭のこのあましり肉厚草の葉は葉

隣うら八朔伝局の重の内東白

草の後にうらむくやの姫さし双

棘咲演の少少あ日の片して野角

蹄をこれ蘇り鱧の丸焼少成

夕見か男を余所へあかり — 虚舟

師も乃銀の志馬多帳面 十丈

灯をこぞ夜はのみ窓に流れて 後三

ありん油 — に二馬多取の 舟油

山乃のおおのき藤 — 花の時 政之

日ハきつうあるは — 山吹 北人

紀りよあまあり  
今こゝに畧し

宿乃秋歌うむむとハあれあなり 支考

恒のま権 — 釣糸の豆舟 涼菟

十六夜にまのあり月此時 — 十丈

菜婦ひの — 息り — のむ 賀枝

やうらる何も下あえ 結のお 万里

太れいゝめハりち及新色 丈

物屋より此日記を寄せて

菟

薪をくりハ 先長共らよの

考

持明より此元也又針仕事

校

船所これ使置りひびしとある

里

貫婦より多猫を鼠をぶらぶらと

考

ふともんはく敷屋ゆてる様

校

葉のころころあふりく吹こられ

丈

あつこに言は淨を悦婦

菟

家内より百あつたハあちつきて

里

風のしら地と柳ニをやく

丈

いふ前と柳子からあはぬ月と并

菟

柳ノらうりを種てあつた

考

二月れをもちれと久くあきて

昔本

ちを踏くありくるを氣つふ

里

小座敷の形も似せぬとあはれ

丈

じーられ上をひりも悦

本

久しきを今年の屋根に這せり

考

ゆきゆきとよきと健

枝

荷下を秋田後田に結也

本

河原の合点より贈して書

里

音源にありんともれ八束の味

考

とんこあよんゆりね草

本

川巻に肝此はゆりあきの月

枝

口に嚙てる巻すけり

考

盗人れやうまの申を引くあり

里

はるの湯をを嚙てやれ

丈

若の髪切れはくさくさの癖

菟

さしゆきやま雨に絶ぬ

老

うはくしとんごう通るも縁の元

丈

かきしきもの葉をあてはる

本



山か温泉に大なる人の人くと  
あまのいふに被妖喜一會

何ゆゆ乃のいれをさあぬまのか 十丈

えうのゆかへり入るる 里拂

金屏を雛のみおしきぬる 被妖

海やううの人の目と見る 肉を

おまぬにふのさゆくはうさく 自笑

水のうしれを冷やくとす 滑白

物羊に喰ぬ 難しきものて 厚為

いつまて人うらむてあつさ 被筆

音経れうらにまのあなけをん 揚

みる作を来しをわくの書 夫

海やあらもさゆりしはの音 雪

まの言喰くは荷のあまのい 妖

あまはさるうらにぬのあつさ 白

月より宵麻に只あつさ 笑

先里乃得去人多ハ情ヲとく  
夫

新ほれ酔もろハ一在の中  
高

換往乃帰をたもれもる事の花  
笑

和高的うらさそと世果也  
獨

系解の身ハハ葉の下燒せん  
妖

風のさハたハ一情も倒せし  
吾

あハ一と情うあの上と情も  
白

おちハ一のあハハ一情も  
白

甲熊の鉦もよちらに屋根とて  
揚

甲舎と客の希多早稲米  
夫

水見居をよ義紙より多す月夜  
吾

妹の雨とて定ハハ一ぬ  
笑

川舟は淀れ極多も 鳴りり  
夫

殿のまきさの合の時ある  
妖

あそ花日を庵れ多そを踏し  
白

掃指さして戸及もつら  
吾

やりとりも仰そ の舟のなまなま ぬすみの河をた るのそひ合 ゆるまを渉舟 なむれ白小舟 きれぬまの山 なまなまや け庭れをうり ぬ白れり後 樹に帰する 麓のうひ守	笑 揚 妖 丈 為 白
--	----------------------------

江上眺を

山道の田植 見ありや藻 芥舟 ちうちうち 松に松 帰路鳥の子 陽子ま の床乃 掛お風 あれて たのしく あう 花う ちれ 名月 れま の舟 を あう れや 秋葉 の 味 う 旅 乃 傳 内	小枝 十丈 牧童 枝 丈 亭
---	-------------------------------

湖をさき、袷をうりけ、野良を

枝

あつた入日から舟をまじむ

丈

松原をかぬきあはき山寺

丈

肩よりけきふのとり

枝

晴られよのらふくと若き

丈

祭乃笛より人さむはけ

丈

波をうらて、残暑のれをの晴のり

枝

砂ぬらこも、草の登り

丈

法皇れをを、お見とこらとて

量

くく宵の月あまきうれ

枝

ひり入もき、はなれを

丈

ゆくの、ほららりうき

亭

三味線れ舟より、遠代はあり

枝

橋に火と、ほ守流す

丈

洗足を、うらふと、雨のほ

亭

花もや、ぬれを、ん

枝

政をゆくとらふの交も一か

丈

首のまことまらふまはる

亭

多き前より師匠の目もすれ

枝

隣れはあしうも帝とさあ

丈

をの中れ師ももさう言か

亭

あて病の月うきい風吹

枝

海よまら室れ揚をのかり

丈

縁人多れそ時をうじむ

亭

み六里しりゆぬふゆけ

枝

露の起り葉乃きり

丈

茶れ伽り嫁もうれ

亭

田ついはけさう棚のま

枝

よひ處に是をゆめり窓あり

丈

るはらうと情あう

亭

誹諧

郭公好生 狎てり 五年 十丈

復と好茶 此おりり 又宿 北人

一雨に恒れ 少角豆 此り 又宿 支考

山に根 係れ 奇麗 成川 丹岫

西河に 海城 吹き 馬の 上 管吳

控灯 節也 八沙 多 月 一 野角

けがの 柳と 高し 教わ 了 乙双

鳥の 伊年 此 嘆ん 綿 芥 也 市仲

笑ひ 並し 三味 線 川の 連 たら 虚舟

町と け 交れ 火を くら ぬ 巴三

道し とき に 夕日 の 照 久 巴 固以

鯉 釣 舟 此 方を あり する 枝動

舟待 小 誠々 満 思 け 東白

便 宜 此 公 に 祈 草 此 禮 政之

のうきものきこもさうしうの月 河菱

廣間乃響しうきりくはせ 紙筆

半多ししてたれも色をゆれに 北人

結仕れそう油くそし 十丈

あせひ目をたーじ心れ登るて 十曲

樂屋乃りやしめ少袖ぬさげ 支考

あさしうたむの鳴るう二庭乃山 林紅

鳴り時き多もあし〜〜 笈吳

畠井乃持こにまこハ茶々海河 野角

板ぬかきハ杖も 子進 ち双

入おの声に捨皮れ屋根へて 市竹

短男れまももの船めうと音 盧赤

蓋も立ちしひそり 早一 苗 時 政之

標れむりしり中の手しし 固奴

賭的しりあたらしりてふかた 十丈

比丘尼を奪うてまると違ふ 赤白

青貝の桶と云ふれあふみ器の音 古考

河の中へあきりありくちり 河

ほらしく雨のこぼれて月のま 簾

江より膝をたふしれむき 化人

大名乃膝をたふれ枯り じ奴

門をぬきあれ目よりわき 丹

降のふりて池田信母とやめ 野角

なごせよと二月八月 梅

ひとりあるあを泣とく 化 盧弁

あはれにやま紀富の庭 市仲

傘れこすたう雨の 巴三

斧所しとく次二もゆ名 工考

忍痛あむしとく何と少 阿

是よりゆきとくあはれ 十文

よも是もさしぬきとく冬 抄

板敷よりわきとれぬき 政之



秋

廿三

胆箸れ音もまにハきハありて 凡人

今ハ日れ日よりとちまたんそそ 野角

そえの時をるれと祖師ハ抄まらる 丹由

初まもそ風ハあそとまらん 夕雲

元

